

電気のふるさと

電源地域ニュース

● 特集 Pick Up!

受け継がれる「学び」と「交流」

人づくりが町の潜在パワーを引き出す

熊本県 小国町



2 人
コーディネーター力が問われる
まちづくり人材
岡崎 昌之

3 Pick Up!
人づくりが
町の潜在パワーを引き出す
熊本県 小国町

8 ふるさと応援団
KUTA (NPO法人国頭ツーリズム協会)
沖縄県 国頭町

10 電源地域の政策トピックス
平成20年度電源立地対策に係る
政府予算案の概要
経済産業省

12 センター掲示板
・「電源地域自治体が活用しやすい補助事業事例集」を発行しました
・大都市圏における物産展に関するお知らせ
・電源地域への企業誘致・立地促進を支援します
・特産品販路拡大支援事業の実施報告
・「エネルギー人形劇」を上演しました
・「原子力発電所見学会」を実施しました
・Vol.10読者の声から
・人事往来
・読者プレゼント
・編集後記

16 電気のふるさと産品自慢
じゃこカツ
愛媛県 伊方町

今号の表紙

はつちようばる
八丁原発電所(九州電力)
総出力:11万kW
運転開始:昭和52年6月(1号機)
:平成2年6月(2号機)



コーディネーター力が問われる まちづくり人材

法政大学 現代福祉学部 学部長
岡崎 昌之

「電 気のふるさと」たる電源市町村を、まちづくりという視点で再生し活性化させていくうえで「人材」は不可欠だ。多くのユニークなまちづくりの現場を支えているのは、まさしく元気で力量のある「人材」たちだ。だから「まちづくりは人づくり」だと標語のように言われ、「よその」「バカもの」「わかもの」の三種の人材必要論が繰り返される。

しかしまちづくりを担う人材は育成できるのだろうか。たしかにビジネスの分野では、多くの人材育成プログラムが存在し、育成セミナーも盛んだ。企業によっては人材育成プログラムやマニュアル化されたノウハウもある。外食産業やコンビニの最前線を担う人たちは、こうしたプログラムで育成される。それが可能なのは、これらのビジネスにおける目標や目的管理対象が比較的明瞭に設定されているからである。まちづくりとは何か、という議論はさておいて、電源市町村においても、何はともあれ、暮らしやすい生活の場を行政と住民が互いの力を出し合って築

き上げていくことは不可欠である。行政の立場であれ、住民の立場であれ、こうした目標に向かって、地域の価値や資源を総結集して取り組む際の総指揮官がまちづくりを支える人材であろう。

ところがまちは多様な課題を抱えている。まちづくりの目標や目的も、一点にきちんと絞り込むことはなはだ難しい。ハードな施設を作り、道路を建設するというレベルでは一点に絞れるだろう。しかし教育や福祉、環境問題、景観形成といった現在のまちづくりテーマでは、そうはいかない。利害関係や関わる人たちも多岐に及ぶ。今後、こうした複雑なまちづくりに取り組もうとするまちの総指揮官に問われるのは、多様な人びとや組織の間を調整し、一つの方向へと統合するコーディネーター力であろう。特定の問題に関する深い専門的造詣と、他分野にわたる幅広いネットワークこそがコーディネーター力を形成する。これからのまちづくり人材に問われるのはこのこととなる。

熊本県 小国町

おぐにまち



九州を代表する林業のまちとして栄えた小国町

九州のほぼ中央、熊本県の最北端に位置する小国町は、筑後川の上流・阿蘇外輪山の外側に広がる緑豊かなまちです。総面積の七十四パーセントが山林で占められ、約百三十七平方キロメートルに約八千三百人が暮らしています。町内には渓谷の清流を挟んで三十軒ほどのホテル・旅館が立ち並び、杖立温泉をはじめ、小国富士と呼ばれる湧蓋山の源泉を利用した温泉が数多くあります。また小国町は、年間二キロを超える雨量と肥沃な土壌が杉の生育に適しており、明治以来、積極的に杉の造林が進められ、林業と製材関連産業が町の経済を支えてきました。町内には九州電力(株)の松原水力発電所(出力五万キロワット)があり、また近隣には同八丁原地熱発電所(出力十二万キロワット)があり地域に電気を供給しています。

「建築」をテーマにしたまちづくりを推進

受け継がれる「学び」と「交流」 人づくりが町の潜在パワーを引き出す

Pick Up

熊本県阿蘇郡小国町は、雄大な阿蘇の麓にある緑豊かなまちです。特産の杉を利用した数々の建築物で脚光を浴びる中、都市と農村の交流をめざす“ツーリズム”に着目。その担い手を育てるための「九州ツーリズム大学」を開設し、地域特性を活かしながら町ぐるみの発展を続けています。今回は、九州ツーリズム大学を中心に「人材育成」と「交流」で地域づくりを進める、小国町の取り組みをご紹介します。

昭和六十年、小国町の地域づくりを推進する運動「悠木の里づくり」がスタートしました。この運動は、小国町の自然を背景に培われてきた伝統や文化など地域資源を、町民の力で活かしていくこととするもので、当時の宮崎嶋俊町長が積極的に推進しました。まずは特産の小国杉を利用し、廃止となった旧国鉄宮原線「肥後小国駅」の跡地に、建築デザイナーを起用して「道の駅・小国ゆうステーション」を建設。杉角材を特殊な金具で接合し、三角形に組み合わせていくという木造立体トラス構法を日本で初めて採用しました。また同構法による「林業総合センター」、町民体育館「小国ドーム」も相次いでオープンしました。斬新なデザインが印象的なこれらの建築物は、日本建築学会賞を受賞して話題となり、視察団など多くの人を町に呼び寄せたのです。後に「九



1. 九州ツーリズム大学のメインキャンパスとなっている「木魂館」とその後ろに見えるのが湧蓋山。「木魂館」は会議室や食堂、浴場(温泉)、宿泊施設などを完備している。
2. 「小国ドーム」の外観。屋根はステンレス張りになっていて、巨大な亀の甲羅のように見えることから、BIG TURTLE(ビッグタートル)の愛称で親しまれている。
3. 「小国ドーム」の中。杉角材5,602本を使用して建てられた、その構造を見る事ができる。
4. 平成12年に開校した「おぐに自然学校」。九州ツーリズム大学の保育園と小学校に位置付けられ、子どもたちに小国の自然の中で様々な体験をしてもらう。

お問合わせ先: 小国町役場 商工企業促進課 TEL 0967-46-2113



小国町役場 商工企業促進課 課長 江藤 訓重さん

んはその後、平成十七年まで「財団法人学びやの里」事務局長、平成十九年から同理事長を歴任され、「九州ツーリズム大学」の設立、運営に深くかかわって

いくのです。

州ツーリズム大学」のメインキャンパスとなる「木魂館」も、同時にオープンしています。こうした活動が評価され、小国町は昭和六十三年に「活力あるまちづくり自治大臣賞」を受けました。

さらに宮崎前町長は、まちづくりの新たな展開を模索するため、平成元年からシンポジウムや地区懇話会などを積極的に開催。その結果を「小国ニューシナリオ」としてまとめました。また、住民の浄財によって平成八年に「財団法人学びやの里」を設立し、

大学づくりのきっかけは九州ツーリズムシンポジウム

研究、観光、福祉、環境保全の四部門に分けて高齢化や環境問題に対処することとした。このプランニングチームに、民間から参加したのが現小国町役場商工企業促進課の江藤訓重さんです。江藤さ

小国町で内外の人の交流が進んでいく中、全国的にグリーンツーリズムが注目されるようになってきました。ツーリズムとは、訪れた地の自然環境とそこでの体験、またそこに暮らす人たちのふれあいを楽しむ新しい旅の形態です。平成八年、こ

のツーリズムを通じ農山村の自立や振興を図ることを目的として、「木魂館」において「九州ツーリズムシンポジウム」が開催されました。シンポジウム参加者の共通の悩みとして、「ツーリズムを実践していく中で人材育成や実践的なノウハウを学ぶ場が無い」ところが挙げられ、そこから「九州でツーリズムの人材育成をやろう、その拠点となる学びの場を作ろう」という声が始まりました。

地域活性の担い手を育てる「九州ツーリズム大学」を開校

半徑百キロがキャンパス ツーリズムの現場で学ぶ

「九州ツーリズム大学」は、農山村で地域に合ったツーリズムを実践していく担い手やコーディネーターでできるリーダーの育成を目的として創設されました。また同時にツーリズム関連の有益な情報を集約・活用すること、これからツーリズムを展開していく人たちの広いネットワークを作

は二泊三日で月一回のペースで計七回。ツーリズムに関心があれば誰でも受講でき、全課程を受けた人が卒業生、スポットで受けた聴講生のうち三回以上の聴講生は修了生と呼ばれます。

さらに小国町には、古くから教育に熱心な下地があった

「開校当初の受講生は、生産現場で働く方や農家の主婦の方が多かったですね。現在は九割が町外からの方です。第一期生は修了生も入れて五十数名、毎年同じくらい募集して平均の卒業生は三十人くらい。これまでに十年間で卒業生は約三百人、修了生も合

わせると約千五百人になります」と語るのには、「財団法人学びやの里」の現事務局長である小野寿宏さん。小野さんは小国町役場職員として、「九州ツーリズム大学」の立ち上げにかかわり、平成十七年から現職です。授業は「木魂館」を本館として小国町内、さらに大分県の湯布院や安心院などで行われ、半徑百キロ以内

ます」と小野さん。現在、大学には「ツーリズム学科」と「観光まちづくり学科」の二学科が設置されています。

全国そして海外からも視察団がやってくる

「面白い授業に、レストランの経営者としてメニューづくりや値段設定も体験する」一日農家レストランや、野原で実際に行ううさぎ追いや、町を歩いて集落の宝物さがしをする。集落ウォッチングなどがあります。また、湯布院のおもてなし研修では、実際に各旅館に入ってスタッフのひとりとして働いたりし

現在は順調に運営している「九州ツーリズム大学」ですが、開校時は資金集めに苦労したと、小野さんは話します。「大学開設時期の関係上、初年度は予算に組み込んでもらえず国からの助成金がもらえませんでした。県・町からのバックアップを受けて始まり、第二期から第九期までは農水省の助成金を受けてやってきました。昨年の第十期から再び県のみの支援を受け運営しています」。

になりました。卒業生は九州を中心に四国、中国、首都圏にまで及んでいます。また最近では、学生たちの入学の動機も様々だということ。「農家民泊などの交流ビジネスを興したい人、市町村や県の関係者、現役大学生、農山村への移住やUターンを考えている人、自分探しや生き甲斐探しをする人など動機はいろいろ。でもそれぞれに志を持った面白い人が集まっています。回を重ねるごとに都市住民や若い人、そして女性の割合が多くなっているようです」と小野さんは大学の現状を語ってくれました。

入学希望者が続々…なぜ発展し続けられるのか

「九州ツーリズム大学」の取り組みが十年を超えて継続され、ますます発展を続けている理由について、江藤さんに伺いました。

「一番大きなポイントは、事務局がしっかりしていることです。何かを始める時、軌道に乗るまでは、担当者



財団法人 学びやの里 事務局長 小野 寿宏さん

当初はツーリズムという言葉葉自体がよく知られておらず、町や外部に浸透するのに六、七年かかったとのこと

知されてからは、日本全国のみならず韓国からも多くの人が大学や小国町を視察するよう

「九州ツーリズム大学」の授業風景

写真上は「木魂館」での座学・写真下は直売の実習



さらに江藤さんは交流によ

話を紹介します。

コロナ変えるべきではありません。私の場合は八年間事務局をさせていただきました。また、「継続は力なり」で、続けることが重要なことです。資金面でも運営面でも、忘れることもやり過ぎることもなく歩んでいくことが、継続の秘訣ではないでしょうか。ただ、私の場合、楽しいからこそ十年間やってこられた、という大前提がありますけどね。また、成功要因の一つとして、「九州ツーリズム大学」という名前がよかった。これが「小国ツーリズム大学」では、都会の人たちはやってこない。九州という開かれたイメージの効果も大きいと思います」。

「全国から講師の先生や学生が集まってきて、町の中で交流が生まれる。先生や町を訪れた観光の専門家たちが、大学を積極的にアピールしてくれる。毎回増えていく卒業生たちが核となって、情報のネットワークが広がる。様々な要因が有機的に繋がって、大学の発展に寄与しているのです」。

そして、なんといっても江藤さんが手応えを感じたのは、卒業生の中からツーリズムの実践者が生まれたことだとい

います。小国町をフィールドに活動する三人の実践者のお話を紹介します。

受講生の中から町のツーリズム実践者が誕生



九州ツーリズム大学
講師 岩元 幸明さん

生徒から講師へ 同級生とは今も交流

「自宅は熊本・水前寺ですが、週に四日は小国町に来ていますよ」と笑顔で話すのは、第四期卒業生の岩元幸明さん。現在は「九州ツーリズム大学」で「うさぎ追い」の講師をしています。

「以前『うさぎ追い』の授業を受けた先生の勧めで、狩猟(毘)の免許を取って講師になりました。『うさぎ追い』は、数十人の参加者が、追っ手と押さえ手の二班に分かれ、追っ手が原野を『ちよいい。ちよいい』かけ声をかけながら竹で地面をたたき、野うさぎを追い出し、網に絡んだところを、押さえ手が押さえるという楽しいものです。そして、捕まえ

ても捕まえられなくても、事前に用意しているうさぎ汁をみんなで囲みます」と語ってくれました。

「歳をとったら田舎で暮らしたいと思って、『九州ツーリズム大学』に入りました。授業も楽しかったけれど、毎月いろいろな職業や年齢の『同級生』たちと会うのが楽しみでした。同期の卒業生は二十五名いて、今でも連絡を取り合っています。」

岩元さんは、小国にログハウス「小国ガルテン」を建て、町の行事があつた際などの宿泊所としても利用されており、友人・知人と合わせて多いときで年間二百人が泊まりに来るとのことです。

「商家民泊」の第一号 金儲けより人儲け

「著名な先生の生講義が聴ける。それが魅力で大学に行っています」と話すのは、小国町で商家民泊「ササク蔵ブ」を主宰する北里香代さん。

以前から、地域の勉強会などに積極的に関わっていた北里さんは、ツーリズムの勉強を重ねるうちに、実践に結び付けないと意味がないのでは、という気持ちを抱くようになったそうです。

「うちは時計店を営んできましたが、平成十三年に『ギャラリー北里』にリニューアルしました。その時に、百年経た蔵を整理したら、昔の家具やら日用品がザクザク出てきました。そこから、古き良き時代のもを活用した民泊を考えはじめました。」

ただ、ツーリズムで民泊といえは農家民泊が主流です。商家はかかわることが難しいのではと思うときもあつたといえます。

「でも、おもてなしの心は農家も商家も同じと思ひ、蔵を寝室に改装して平成十五年から商家民泊を始めました。」

客室には昔の日用品などが飾られ、北里さんが小国の特産品で作る家庭料理はお客様

「学び」と「交流」が さらに町を元気にする

「ブランド化」が 様々な付加価値を産む

九州ツーリズム大学の「学び」を基本にした取り組みは、地域の活性化に様々な効果をもたらしました。その大きな要因の一つに「ブランド化」があると、江藤さんは語ります。「大学の活動が評価されるようになり、様々な分野の著名な先生たちも積極的に町に来てくれる。意欲的な学生も集まる。つまり人も情報もレベ

ルアップして集まってくるわけです。中には『大学で是非講義をしたい』と要望される先生もおり、大学のブランド化は着実に進展しています。」

また、それに伴う相乗効果で、町内外で「ツーリズムⅡ小国町」と認識されるほどになつてきたと江藤さんは続けます。「財団法人学びの里」では、平成十七年より他県の中学校の生徒たちが、小国町の農家に二泊三日滞在して農村の暮らしを学んでもらう『うるるん体験教育』の受け入れを始め、好評を得ています。来年も八校が来る予定になつていきます。昨年九十軒(一軒に三人ほど宿泊)の農

家が生徒を受け入れましたが、小国町民のツーリズムに対する意識の高揚があつてこそ実現したと思つています。また、町への移住者が増えてきています。」

九州ツーリズム大学の可能性は無量大

九州ツーリズム大学の活動は全国的にも影響を与え、後を追う形で「北海道ツーリズム大学」「南信州めぐり大学」などが設立されています。「ツーリズムという言葉は広まっていますが、現実的に都市と農村をつなぐ手段と環境はまだ整っていません。たとえば農家民泊したいと思つても、山村の奥にどうやって行ったらいいのかわからない。そこで現在、カーナビゲーションと個々のツーリズムの情報

小国町が生んだ 近代医学の父・北里柴三郎



嘉永五年(1853年)、北里柴三郎は総庄屋の長男として北里村(現小国町北里)に生まれました。東京医学校(現東京大学医学部)を卒業後、内務省衛生局に勤務。

国の留学生として結核菌の発見者であるドイツのロベルト・コッホに師事し、そこで貴重な研究業績を次々と発表しました。とくに破傷風菌の純粋培養法の確立と血清療法の発見は前人未踏のもので、世界の医学界にその名を轟かせたのです。

帰国後も自らベスト菌を発見し、志賀潔の赤痢菌発見を指導。また伝染病研究所や私立の北里研究所を設立し、恩賜財団済生会病院、慶応義塾大学医学部、日本医師会、日本医学会などの設立に尽力しました。

町内には博士の遺品や生家の一部などが移築された北里柴三郎記念館があり、今も名譽町民として尊敬されています。

に大好評です。「夕食の後に話が弾んで、気がつくときと真夜中なんてこともよくあります。『金儲けより人儲け』で、町と都会の人とのパイプ役になればと思つています。」

有機野菜を使った レストラン営業に挑戦

「私は実家を継いで小国で農業をしてきましたが、中山間地農業の経営に危機感を感じていました。そこで新しい農業のあり方を知りたくて、『九州ツーリズム大学』に入りました」と、第二期卒業生の河津円幸さんは話します。

河津さんは、平成十五年にイタリアンレストラン「菜園の風」をオープンさせました。料理に使う野菜は、すべて自家製の有機栽培野菜。野菜の美味しさを知る河津さんは、野菜だけで出汁を取るイタリア料理に注目。自己流で料理の腕を磨き、農家レストランのシェフとしてこだわりを持った料理を提供し、馴染み客を増やしています。

「イタリア料理はニンジン、セロリ、タマネギと塩・胡椒で出汁を取ります。ミネラルをたっぷり含んだ野菜本来の味わいが楽しめるんですよ」



商家民泊「ササク蔵ブ」

主宰 北里 香代さん

村の暮らしを学んでもらう『うるるん体験教育』の受け入れを始め、好評を得ています。来年も八校が来る予定になつていきます。昨年九十軒(一軒に三人ほど宿泊)の農



イタリアンレストラン「菜園の風」

オーナー 河津 円幸さん

を見つめています。人づくりと交流で、地域の可能性を大きくふくらませてきた小国町。これからの活動に期待が高まります。



阿蘇外輪山の最高峰で936mの位置にある大観峰

電気のふるさと紀行

小国町の南に延々と連なる阿蘇の外輪山。「阿蘇はあるが、阿蘇山はない」といわれるように、約九十キロメートルにも及ぶ外輪山に囲まれた火山原全体が、阿蘇と呼ばれています。十数年前に数多くの火山が噴火し、その後大陥没がおこって現在の原形になったとか。

展望台から世界最大級のカルデラや、今も噴火口から立ち上る白煙を眺めると、いかに人間一人がちっばけなものであるかを痛感します。一人が小さな存在であるからこそ、人間は繋がり合う。助け合うという知恵を手に入れて生きてきました。この雄大な阿蘇の自然の中で、九州ツーリズム大学も人の繋がりや知恵のネットワークを活用して発展を続けています。

ふるさと応援団・沖縄県国頭村



DATA

KUTA NPO法人国頭ツーリズム協会
 国頭郡国頭村字辺土名245番地
 TEL. 0980-5011600
<http://kuta-okinawa.org/index.htm>

クータ
KUTA
 NPO法人
 国頭ツーリズム協会

沖縄県国頭村は沖縄本島の最北端に位置し、約百九十四平方キロメートルに人口およそ五千六百人、二千四百世帯が海岸沿いに二十の集落を形成しています。村の八十四パーセントは森林で占められており、この森がつながる沖縄本島北部地域を「やんばる（山原）」と呼んでいます。その地域の中でも国頭村は、温暖な海洋性気候の中で独自に進化した多くの生き物たちが、今もなおその生態系を残しており、ヤンバルクイナ（天然記念物）やノグチゲラ（特別天然記念物）などの鳥類のほか、「やんばる」

る固有の両生・爬虫類、昆虫などは特に希少な生物として全国から注目されています。産業はサトウキビやパイナップルの生産を中心とした農業、漁業の他、沖縄本島では唯一木材生産を目的とした林業も営まれています。特に、「やんばる」地域では、琉球王朝時代から、薪炭材を中心とした林産物を沖縄本島の都市部へ供給しており、都市部と「やんばる」とは相互依存の関係にあります。しかし、化石燃料や外国産材の登場によりその相互依存の関係が絶たれると、国頭村の林業は次第に衰退していき、村は森林の新しい利活用方法はないものかと模索しはじめました。

こうした中、当時商工会青年部の部長を務めていた山川安雄さんを中心に、村内有志が集まり、エコツーリズムの勉強会がスタートしました。平成九年には、村のイベントの中で「森林ツアー」を実施し、四つのトレッキングコースを設定し募集をかけたところ、一時間ほどで百五十人の定員がうまるほどの反響を得ました。そしてその人気は、毎年上昇していきました。

しかしながら、「やんばる」への関心が高まると、人が入り込むことで起こる侵食被害が設立されると、自然体験型の観光に注目が集まるようになり、沖縄本島でもこの観光手法が広がりを見せはじめます。そして、多様性に富んだ生態系をもつ国頭村の森林ドとして注目を集めるようになったのです。

その「学ぶ場」は、平成十二年に、山川さんと国頭村を基点に活動する写真家久高将和さんの呼びかけにより、第一回国頭村人材育成講座としてスタートしたのです。さらに、平成十四年には、人材育成講座発足当時からファシリテーターとして参加していた大島順子さん（現在は琉球大学准教授）が加わり、三人を中心とした有志と共に「国頭村ツーリズム協会」が設立されました。



人材育成講座の講義風景



亜熱帯ジャングルカヌー体験

平成十二年から始まった人材育成講座は「KUTA」へ引き継がれ、今では年間二十回六十時間程度の講座を展開し、今年で八期目を迎えます。

地域資源を正しく理解し、地域づくりに主体的に参画できる人材の養成事業として、参加型ワークショップや、地域の宝探しと情報収集のフィールドワークなど数多くの共同作業を受講者同士が取り組みます。ツーリズムだけでなく、「やんばる」の自然

環境の中で生まれた生活文化や地域産業の活用について広く学びます。人材育成講座には、役員職員も参加しており、回を重ねるごとに全村的な活動へ広がりを見せはじめ、役場とのパートナーシップも進んできました。

また、人材育成事業の他「KUTA」では、環境教育・環境学習事業も行っています。地元小中学校の「総合的な学習の時間」で環境学習を指導したり、隣村にある沖縄県立辺土名高等学校の環境科の野外学習授業を担当するなど、次世代層への環境教育を進めています。

また、人材育成事業の他「KUTA」では、環境教育・環境学習事業も行っています。地元小中学校の「総合的な学習の時間」で環境学習を指導したり、隣村にある沖縄県立辺土名高等学校の環境科の野外学習授業を担当するなど、次世代層への環境教育を進めています。

「KUTA」が目指す「地域の宝は何かを理解し、伝えられる人づくり」の地道な活動は村だけでなく、村外へも着実に広がりを見せています。

昨年十月、村内の各分野の団体・個人が参加した「やんばる国頭の森を守り活かす連絡協議会」が発足したのです。これは国頭村の産業は貴重な自然環境に育まれた生活文化のもとで成り立ち、産業と地域環境は相互関係にあるという考え方に基づき、自然と共生しながら「持続可能な環境

が設立されると、自然体験型の観光に注目が集まるようになり、沖縄本島でもこの観光手法が広がりを見せはじめます。そして、多様性に富んだ生態系をもつ国頭村の森林ドとして注目を集めるようになったのです。

その「学ぶ場」は、平成十二年に、山川さんと国頭村を基点に活動する写真家久高将和さんの呼びかけにより、第一回国頭村人材育成講座としてスタートしたのです。さらに、平成十四年には、人材育成講座発足当時からファシリテーターとして参加していた大島順子さん（現在は琉球大学准教授）が加わり、三人を中心とした有志と共に「国頭村ツーリズム協会」が設立されました。



国頭村環境教育センター やんばる学びの森

「第1回沖縄県子ども環境サミット」の様子

平成二十年度電源立地対策に係る政府予算案の概要

経済産業省

■基本方針■

平成二十年度予算においては、歳出の合理化を図りつつ、

- ①原子力発電所、核燃料サイクル施設や最終処分施設の立地に対応した地域振興の拡充
- ②平成十九年新潟県中越沖地震の影響を踏まえ、耐震安全性の評価・確認作業の前倒し及びその評価・確認方法の高度化の点に重点をおいた施策を講ずることとする。

■ポイント■

平成二十年度予算については、右記の基本方針のもと、

- ①電源立地対策に係る経済産業省分の政策的経費として千五百九十二億円（前年度比十五億円増）を確保するとともに
- ②耐震安全性・防災対策の強化のため、電源開発促進勘定全体で百十四億円（前年度比三十四億円増）を計上し、この

うち、電源立地対策に係る経済産業省分の予算から九十九億円（前年度比二十三億円増）を確保する。

を継続する。

1. 原子力発電施設等の地域との共生を図る地域振興

原子力発電所、核燃料サイクル施設の立地を積極的に推進するとともに、最終処分地確保に向けた取組を促進するため、地域振興に係る施策を強化する。

①電源立地地域対策交付金

千四百億円（千五百四十四億円）

原子力発電所や核燃料サイクル施設の立地の進展に伴う増額を確保する。また、高レベル放射性廃棄物等の最終処分候補地の選定を促進するため、文献調査段階の電源立地地域対策交付金の交付額を単年度あたり十億円（総額二十億円）にする措置

②放射性廃棄物対策の強化

九億円（三億円）

高レベル放射性廃棄物等の最終処分事業推進に向けて、理解促進を図るため、広聴・広報活動を増強するとともに必要な設備を整備するなど取組を強化する。

③核燃料サイクル交付金、原子力発電施設立地地域共生交付金

二十億円（十六億円）

高経年化炉と立地地域との共生を実現し、核燃料サイクル施設の実地やプルサーマルの実施を促進するために必要な増額を確保する。

④原子力発電施設等周辺地域企業立地支援事業費補助金の拡充

六十九億円（五十一億円）

製造業等の雇用効果の高い企業の誘致を進めるため、現行

2. 原子力安全・防災対策の確実な推進

の電気料金の補助制度に加えて、製造業等が新増設した場合において、新たな雇用に応じた補助を行う制度を新設する。

※核燃料サイクル交付金については、プルサーマルへの平成十九年度内の事前了解を交付要件としていたが、平成二十年度内までに、期間を一年間延長する。

①原子力耐震・防災対策の強化

平成十九年新潟県中越沖地震が柏崎刈羽原子力発電所に与えた影響を踏まえ、耐震安全性の評価・確認作業の前倒し及びその評価・確認方法の高度化を実施するとともに、災害時における防災システム等の機能強化を図る。その他、原子力安全性に関する広聴・広報活動を拡充し、迅速かつきめ細やかな原子力安全性情報の提供の強化を図り、原子力に対する安心感を醸

成する。

- ・原子力発電施設等緊急時安全対策交付金 三十三億円（三十二億円）
- ・原子力発電施設等緊急時対策技術等 四十四億円（三十一億円）
- ・原子力発電施設等の耐震性評価技術に関する試験及び調査 十四億円（十四億円）

②高経年化対策等原子力安全確保対策の拡充

耐震安全性対策のみならず、高経年化対策をはじめとする原子力安全を確保するための対策に引き続き取り組み、さらにその手法を高度化するために、国内材料試験炉を活用した照射設備の拡充を進めるなど技術基盤整備や安全研究を推進する。

- ・高経年化対策強化基盤整備事業 十四億円（十三億円）
- ・軽水炉燃料材料詳細健全性調査 十八億円（七億円）

※（ ）内は平成十九年度予算額

平成20年度電源立地対策政府予算案の概要

	平成 20 年度予算案	平成 19 年度予算額	増▲減
1. 電源地域振興	1,302	1,289	13
・電源立地地域対策交付金	(1,104)	(1,054)	(50)
・原子力発電施設等立地地域特別交付金	(32)	(30)	(2)
・核燃料サイクル交付金	(10)	(8)	(2)
・原子力発電施設立地地域共生交付金	(10)	(8)	(2)
2. 原子力安全・防災対策	266	264	2
3. その他	24	24	1
政策的経費計	1,592	1,577	15
周辺地域整備資金への積立	96	110	▲ 14
(累積額)	(1,079)	(1,120)	(▲ 41)
経済産業省計	1,688	1,687	1

(注) 合計は四捨五入の関係で一致しないことがある。

「電源地域自治体が活用しやすい補助事業事例集」を発行しました

(財)電源地域振興センターでは、この度、電源地域自治体の方々が活用しやすい補助事業や支援事業等について、各地の活用事例を含めて取りまとめた「電源地域自治体が活用しやすい補助事業事例集」を発行いたしました。

これは、国が自治体の地域振興への取り組みに対して支援する様々な制度を「商業振興」「観光」など七つの地域振興のテーマ別に分類して、「考

えられる施策」や「主な支援策」など、解説を加えて掲載しています。

■補助事業事例集のお問い合わせ先
 (財)電源地域振興センター 調査企画課
 電話：03・5405・8112
 e-mail: chousakikaku@dengen.or.jp

大都市圏における物産展に関するお知らせ

この度、神奈川県横浜市の「パシフィコ横浜」にて、六月十九日(木)～二十二日(日)の四日間、(社)日本観光協会が開催する「旅フェア2008」が開催されます。

全国各地の観光情報と多くの特産品が一堂に揃う展示会とあって、毎年十五万人もの来場者が訪れています。電源地域で生み出された産品の開発・改良と販路拡大・販売力向上につな

がる大変有効な場所であり、このような物産展への参加機会をお探しの方は、ぜひご検討ください。

詳しくは、左記の「旅フェア事務局」までお問い合わせください。

【旅フェア事務局(社団法人日本観光協会内)】
 電話：03・6222・2540
 e-mail: info@tabfair.jp
 URL: http://www.tabfair.jp/

※なお、旅費等の補助金はありません。

電源地域への企業誘致・立地促進を支援します

(財)電源地域振興センターでは、電源地域における企業立地などを支援しています。

企業に対しては、各種イベントにおけるブース出展や企業説明会などを通じて電源地域における立地環境や支援制度情報を総合的に提供しています。

また、立地意向のある企業に対しては直接訪問し、候補となる電源地域が用意する優遇措置や事業環境等のPRを行っています。

自治体に対しては、最新の企業立地意向や業界の動向を踏まえ、企業ニーズにあった立地環境整備を図っていたため、ダイレクトメール事業によ



電源地域マップ

り企業の地方立地意向調査を実施し、分析・整理の上で情報提供を行っています。

さらに、特定市町村の要望に基づき、企業誘致方策を検討する「企業導入計画調査」なども実施しています。

このほか、電源地域への誘致活動資料として「電源地域立地支援制度の概要」「電源地域マップ」を発行し、電源地域を広くPRしています。



電源地域立地支援制度の概要

当センターでは、地域特性を生かした提案型誘致を実現するため、今後も各地域の皆さまと連携を密にし、相互情報交換を行っていきたくと考えています。

企業誘致支援などについてのお問い合わせ：ご相談はこちらまでご連絡ください。

■お問い合わせ先
 (財)電源地域振興センター 企業誘致課
 電話：03・5405・8116
 e-mail: yuuchi@dengen.or.jp

特産品販路拡大支援事業の実施報告

経済産業省資源エネルギー庁の委託を受けて、電源地域における特産品の販路拡大等を支援する事業を実施しました。

一、産品相談・商談会

電源地域の事業者を対象として、三越・高島屋・伊勢丹等大手百貨店やイトーヨーカ堂等大手スーパーのバイヤーが直接面談し、商品の評価やアドバイス、店舗で扱う場合の条件等を指導するという産品相談・商談会を実施しました。

今年度は首都圏を中心に、大阪・広島・札幌でも開催し、九カ所の会場で百八十一事業者と約六十人のバ



産品相談・商談会の風景

イヤーが集い、四百五十七件の相談・商談を行いました。

回を重ねることに参加者は増えており、産品の中には評価が高く、出店に結びついた商品もありました。バイヤーからは「産地の考え方・方針が良く分かり、勉強になった」、事業者からは「積極的なアドバイスを多く頂き、今後の取り組みに期待が持てます」等の感想があり、事業者・バイヤー双方がこの事業へ高い期待を寄せていることがうかがえました。

二、対面販売チャレンジの開催

電源地域の特産品を扱う事業者が百貨店・スーパーの催事場等で、大都市圏の消費者に向けた実践販売を行う「対面販売チャレンジ」を実施しました。

産品・商談会等で高い評価を得た事業者が主に参加し、今年度はイトーヨーカ堂(東京で二回と横浜)と岩田屋(福岡)、藤崎(仙台)と合わせて五回実施しました。

対面販売の中でお客さまの声を聞き、大都市圏の消費者のニーズを知ると

もに、バイヤーやフロアマネジャーから販売方法や展示方法、商品の改善点等のアドバイスを受けました。

参加した四十七の事業者からは「初めての百貨店や大手スーパーでの販売で、戸惑いがあったが、習得したものが多く、今後に生かしていきたい」との声が聞かれました。



イトーヨーカ堂・木場店で対面販売の実施風景

三、佐田岬伊方町の観光と物産展を開催しました

一月九日(水)～十五日(火)の七日間、愛媛県伊方町の物産展を日本橋高島屋で開催しました。これは原子力立地地域の自立的・持続的な発展及びエネル



日本橋高島屋の催事場にて

ギー消費地域の方々に原子力立地地域への理解を深めていただくことを目的とした事業です。

物産展の開催に先立ち、伊方町の観光協会や事業者の方々とマーケティングや、販売方法等について学ぶ勉強会を三回実施。物産展の会期中は「岬あじ・岬さば」に代表される新鮮な海の幸や「媛の匠(みかん)」「こぼん」等の柑橘類、「じゃこ天」「じゃこカツ」等地元でも人気の高い特産品約七十点を販売しました。

また、売り場に設けた観光PRデスクには、来場者が伊方町の見どころを自由に閲覧できるようにパソコンを設置し、首都圏の消費者に伊方町情報について見識を深めていただきました。

「エネルギー人形劇」を上演しました

経済産業省資源エネルギー庁の委託を受け、全国で次世代層向けのエネルギー人形劇を上演しました。

十二月には松江市立島根小学校及び恵曇小学校、一月には玄海町立飯屋小学校及び町民会館にて上演し、合計百七十六名の方にご覧いただきました。これにより平成十九年度に予定していた八カ所での上演をすべて終了しました。

人形劇は、えねお(元気が少しわがままな男の子)とニャーコ(もの知りなネコ)がCO₂発生怪獣ニサンゴンと戦い、最後には三人で地球環境について考えていくという内容で、上演時間は二十五分程度です。

ご覧いただいた方にお配りしている「エネルギーミニ絵本」巻末のアンケートでは、「省エネについて、家庭でもできることからするようになった」などの感想が聞かれました。

■お問い合わせ先
【財】電源地域振興センター 普及啓発課
電話：03・5405・8128
e-mail: fuky@den-gen.or.jp #7



松江市立島根小学校での上映風景



玄海町立飯屋小学校での上映風景

「原子力発電所見学会」を実施しました

経済産業省資源エネルギー庁の委託を受け、原子力発電の必要性や安全性、立地地域の実状に対する認知向上や理解促進を図る「原子力発電所見学会」を全国で実施しました。

一月には日本原子力発電(株)東海第二発電所、関西電力(株)大飯発電所、二月には中部電力(株)浜岡原子力発電所の見学会を実施し、それぞれ電力消費地である東京都内、神戸市、横浜市などから教職員や自治体職員など計百五十六人に参加いただきました。これにより、平成十九年度に予定していた十回の見学会を終了しました。

見学者からは、「マスメディアからの情報だけでなく、自分の目で現場をみる大切さを実感した」「学校の授業で取り上げたい」といった声が聞かれました。

■お問い合わせ先
【財】電源地域振興センター 普及啓発課
電話：03・5405・8128
e-mail: fuky@den-gen.or.jp #7



2月2日 中部電力(株)浜岡原子力発電所・訓練センター



1月26日 関西電力(株)大飯発電所・PR館



1月19日 日本原子力発電(株)東海第二発電所・意見交換会風景

【Vol.10 読者の声から】

●特集「Pick Up」で取り上げた広島県安芸高田市の取り組み「住民と行政の協働」のまちづくりは大変参考になりました。というのも、私の住む村は合併こそしていませんが、行政と地域住民との関わり方について考えていく時期にきていると思うからです。

(長野県豊丘村 女性)

●「住民と行政の協働」により地域活性化を進めている広島県安芸高田市の事例は、地域振興の是非を決めるもの、まさしく住民と行政の協働であり、いかに住民のパワーを活用す

るかがポイントであることに気づかせてくれた。

(香川県高松市 男性)

●私の町では、昨年十一月に「吉岡銅山遺跡」や「笹畝坑道」などが経済産業省の「近代化産業遺産」に認定されました。現在、それら遺産を生かした観光開発を進めています。

(岡山県高梁市 男性)

●私の町美唄市は、黒紫色の実と強い酸味の特徴の木の実「ハスカップ」の生産量が北海道内で第一位です。このハスカップにはビタミンC、カルシウム、鉄分などが多く含まれて

いて、北海道の先住民であるアイヌの人達の間でも昔から「不老不死の木の実」として食べられていたそうです。

(北海道美唄市 男性)

●人と人が力を合わせると、こんなにも笑顔。ピカピカに暮らせるんだと毎号読むたび、考えさせられます。

(宮崎県延岡市 女性)

●高島市では、陽明学の祖である中江藤樹が生誕して四百年となることから、いろんな記念事業が検討されています。

(滋賀県高島市 男性)

【読者プレゼント】

今号の特集「Pick Up」にご登場いただきました熊本県小国町のご厚意により、「ジャーシューヨーグルトセット」を五名様にプレゼントいたします。

とじ込みのアンケートハガキに本紙へのご意見、ご感想などをご記入の上、平成二十年四月二十日(消印有効)までにお送りください。なお、当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。



【編集後記】

「食の安全」について関心が高まっている中、首都圏の駅構内にある産直の売り上げが、二倍になっているとのニュースを見ました。また、最近では産直コーナーを設けるスーパーもあり、「作っている人の顔が見える」など信頼性が消費者のニーズのようです。

電源地域には「食」にまつわる地域資源がたくさんあります。この機会に、日本のさまざまな食材に目を向け、さらには伝統的な調理法や保存方法等、先代の知恵を学ぶ良い機会にしていきたいと思っています。(S)

人事往来

●電源立地都道府県知事(平成19年11月～平成20年1月選挙分)

都道府県名	氏名	当選月日
高知	尾崎 正直	11月25日
大阪	橋下 徹	1月27日

●電源地域市町村首長(平成19年11月～平成20年1月選挙分)

市町村名	氏名	当選月日
南牧村(長野)	菊池 幸彦	11月11日
阿南市(徳島)	岩浅 嘉仁	11月11日
長岡市(新潟)	森 民夫	11月11日
飯島町(長野)	高坂 宗昭	11月13日
青梅市(東京)	竹内 俊夫	11月18日
常滑市(愛知)	片岡 憲彦	11月18日
いなべ市(三重)	日沖 靖	11月18日
宿毛市(高知)	中西 清二	11月18日
富士河口湖町(山梨)	渡邊 凱保	11月18日
南相木村(長野)	中島 育男	11月21日
高知市(高知)	岡崎 誠也	11月25日
南国市(高知)	橋詰 寿人	11月25日
岩泉町(岩手)	伊達 勝身	11月28日
福岡町(兵庫)	嶋田 正義	11月28日
浪江町(福島)	馬場 有	12月2日
大口市(鹿児島)	隈元 新	12月10日
福井市(福井)	東村 新一	12月23日
芝川町(静岡)	野村 寛	12月23日
八百津町(岐阜)	赤塚 新吾	1月15日
六戸町(青森)	吉田 豊	1月15日
中之条町(群馬)	入内島 道隆	1月15日
泊村(北海道)	牧野 浩臣	1月20日
駒ヶ根市(長野)	杉本 幸治	1月20日
大津市(滋賀)	目片 信	1月20日
出雲崎町(新潟)	小林 則幸	1月27日

■ 産品自慢 —— Vol.11 愛媛県 伊方町

じゃこカツ

四国最西端にある日本一細長い半島「佐田岬半島」に位置する愛媛県伊方町は、平成17年4月1日に、旧三崎、瀬戸、伊方の3町が合併し誕生しました。瀬戸内海と宇和海に挟まれ、風光明媚で温暖なこの地は「耕して天に至る」と言われる段々畑にたわわに実る「温州みかん」や「清見タンゴール」、「デコポン」などの柑橘類、九州との間に広がる豊予海峡で水揚げされる「岬アジ・岬サバ」をはじめ新鮮な魚介類など、多くの自然の幸があふれています。

今回ご紹介する「じゃこカツ」は、愛媛の郷土料理である「じゃこ天」に伊方町の特産品として独自性を打ち出せないものかと考案された商品で、新鮮な魚をすり身にし、ニンジンや玉ネギなどの野菜を加え、独自の味付けを施したものに、パン粉をつけカツ風に揚げたものです。

魚のすり身をそのまま油で揚げる「じゃこ天」とは異なり、その食感は、まさに「カツ」。カラッと揚げた衣を一口かじると、プリプリとした食感とジュワッとあふれる魚と野菜のうまみが口の中に広がります。

「じゃこカツ」は、同町の「道の駅 きらら館」そばにある「伊方じゃこ店きらら店」で、揚げたての「じゃこカツ」を買うことができる他、5枚1パックにした冷凍の「じゃこカツ」も販売しており、家庭でも簡単に揚げられ、おかずの1品やビールのおつまみとして人



仕上げは一枚一枚手作業で行っています



じゃこカツ (冷凍 5枚入)
500円 (税込、容器・送料別)

気です。また、じゃこカツカレー、じゃこカツ丼などと工夫していただくことでより一層おいしく召し上がれます。魚嫌いのお子さまも、きっとおいしく食べてくれるはずです。

お問い合わせ先
株式会社クリエイト伊方
TEL 0894-38-2100
FAX 0894-38-2105